

上郡町の偉人

大鳥圭介

「鵬程万里」第十二回

著者 中川由香

今回は、圭介の妻みちについてです。みちは一八三九年生まれで、圭介より七歳下でした。出雲藩士矢島大三の娘で、江戸の麹町の藩邸で生まれました。圭介がまだ阿波藩士で江川塾の講師として教鞭を取っている頃に、江川の紹介で結婚しました。性格は貞淑にして苛烈、困窮した者を助け賑わせ、和歌を詠み、詩歌に卓越し、茶を嗜み、外交的で、教養ある女性でした。蘭学に邁進する圭介の好奇心も、ほほえましく感じていたことでしょう。

婚礼の式を上げた後、みちは一男二女をもうけますが、圭介は多忙を極めました。幕臣となった直後、横浜へ単身赴任し、陸軍教練と指南書の翻訳に明け暮れました。その後、幕府は鳥羽伏見の戦いに敗れ、江戸城を新政府軍に明け渡します。圭介は脱走と新政府との抗戦を決意。その際、圭介は家族を千葉佐倉の洋学者仲間^の知己に預けます。この時みちは圭介に「夫が王家の為に節を貫こうとする。私も武臣の妻です。夫と死生を共にします」と涙ながらに相對して訴えました。圭介はその言葉に感動しながらも「物の道理もまだ分からない子供が三人、もし両親共に死ねば誰が育てられるのか。自分分は徒死しない、形勢を見て戻ってくる」とみちを諭し、所持金を全て託し、佐倉への避難を受け入れさせました。

その後圭介は戊辰戦争で一年余、三十数回の戦

闘に身を費やします。圭介が戦の渦中にある中、みちは佐倉で三女きくを出産します。夫は賊軍で明日をも知れぬ身の中、みちは赤子を育てる目途も立てられず、きくは一旦里子に出されました。そして圭介は箱館で敗れ降伏、投獄されます。みちは江戸に戻り、大黒屋の仮名で懇切な差し入れを獄中の圭介に行い支えました。一家の稼ぎ手無く、旗本夫人が皆困窮し身を落としゆく中、夫はいつ死罪となるか分からない身。みちの心労は想像に余りあります。

明治五年一月、圭介は助命され釈放されました。負債だらけの大鳥家の再出発です。圭介はすぐに新政府の開拓使に取り立てられ、きくも引き取り、みちはこれで安心して生活できると思つたことでしょう。しかしその僅か一カ月後、産業視察と政府資金の外債調達のために、圭介は欧米へ旅立ちます。圭介は大蔵省の上官の吉田清成に手紙で何度も留守宅の妻子の事を頼んでいます。みちは圭介不在中に六三を生み、五児の母となっていました。更に圭介は産業を学ぶ為に滞在を延長し、その費用がまた大鳥家の借金となりました。

二年後に圭介は無事帰国しましたが、直後、北海道の未開の山中原野へ石炭調査の為に旅立ちます。明治八年、圭介は工部省に招かれ、同時に今度

続に、もはやみちは諦めの境地だったかもしれない。

明治九年、神戸長崎の造船所や工場の視察に圭介はみちを伴い、五十日の旅に出ました。業務出張とはいえ、新婚旅行すらおぼつかなかった夫婦。ここでようやく水入らずで過ごせたのかもしれない。

明治十一年二月四日、みちは肺病で死去します。享年三十九歳。圭介はこの時、工部省の事務筆頭の大書記官と官営工場を総括する工作局長、さらに内国勸業博覧会審査官を兼ね、激務の渦中にありました。その数日後に圭介は勉勵の功を讃えられ褒章を下賜されましたが、喜びは無かったでしょう。

みちの墓は青山墓地にあります。圭介は墓碑文に、みちが夫の為に、艱難に遭い苦勞と病を重ねながら子を育て、節を尽くした事を、哀しみで涙を払いながら記しました。この碑文は何度も草稿を重ねられ、みちへの感謝と共に、酬いる方法を知らないのが終天の恨みだと圭介は草稿に記しています。共に居られた期間こそ長くはなかったですが、互いに尊敬し合う愛情の深い夫婦でした。圭介の波乱万丈の人生は、みちの支えがあつてこそでした。

圭介が校長だった工部美術学校の教師ラグーザがみちの胸像を作成しました。像は現在失われましたが、像の写真にみちの面影を知る事ができます。



大鳥圭介婦人像
大熊治昭氏 所蔵